The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	CALL教室を活用した日→英翻訳授業の試み : Google イメージ検索で異文化を説明する
Author(s)	小倉, 慶郎
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2009, 7, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11731
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

CALL教室を活用した日→英翻訳授業の試み
―Googleイメージ検索で異文化を説明する―

小倉　慶郎

【要旨】

近年、日本では従来のLL教室を廃止し、CALL教室を設置する大学が増えている。しかし、最新の機材には欠点もある。一般に、「LL教室で使えた基本的機能が使えなくなった」「使い勝手が悪い」などという教員からの不満が多い。といってもCALL教室には「インターネット使用」というLL教室には無い利点があるのを忘れてはならない。インターネットを利用できるのであれば、Googleが使える。Googleのさまざまな機能の中でもイメージ検索は、手軽にインターネット上の画像を検索できるすぐれた機能だ。本論では、このイメージ検索を利用した日→英翻訳の授業の試みを紹介する。「百聞は一見に如かず」というが、授業の中で、言葉による説明だけでは困難だった部分が、画像を見せることによってスムーズにできるようになった。イメージが湧きにくい単語・語句、日本事象の説明などにこの機能は威力を発揮する。また翻訳者の巧みな技術を説明するときにも役立つ。これらの事例を報告したい。

1．はじめに

CALL（コール）とはcomputer-assisted language learningの略語で、「コンピュータ支援による言語学習」のことである。近年、日本ではカセット・テープが急速に使用されなくなった。それとともに老朽化した従来のLL教室を廃止し、CALL教室を設置する大学が急速に増えている。本センターでも、2007年10月から1214 LL教室がCALL教室に変わったのはご存知の通りである。

CALLの主要な利点は一般に２つあると考えられる。１つは、ソフトウエアの活用である。英語学習においては、TOEICをはじめさまざまなソフトが日本で開発され活用されている。ソフトウエアを全面的に利用すれば、学生による自主的・自立的な学習が可能なので、一部の英語教師からは、「もう語学教師は必要なくなるのでないか」という懸念の声すらある。

CALL教室のもう１つの利点は、インターネットを使用できることである。従来のLL教室を愛用していた教員からは、「LL教室で使えた基本的機能が使えなくなった」「使い勝手が悪い」などという不満の声も聞こえてくる。しかし、「インターネット使用」という利点を活用しないのはもったいない。インターネットを利用した授業といえば、e-learningが代表的だが、私は、日→英翻訳の授業で、インターネットを補助教材として利用している。インターネットを利用できるのであれば、Googleが使える。そしてGoogleのイメージ検索は、ネット上のさまざま画像をパソコンで見られる学習上有益な機能である。

本稿では、Googleのイメージ検索を活用した日→英翻訳の授業の試みを紹介したい。

2．Googleイメージ検索とは

Googleはいうまでもなく、世界最大の検索エンジンである。フリー百科事典『ウィキペディア』によれば「独自開発したプログラムが、世界中のウェブサイトを巡回して情報を集め、検索用の索引を作り続けている。約30万台のコンピュータが稼動中」という。この検索エンジン

Googleの機能の中で、ユーザーがインターネット上の画像だけを検索できるようにした機能が「イメージ検索」である。Googleの運営会社によれば、この検索によって4億2500万以上の画像を検索できるという（2009年1月現在)。この「イメージ検索」の活用の仕方は人によってさまざまだが、言語学習者にとっては、母国語・外国語を問わず、手軽に言葉のイメージを調べられるすぐれた機能である。

"A picture is worth a thousand words."（1枚の写真・絵は、1000語の価値がある）という英語のことわざがある。日本語のことわざに同じ意味のものを探せば、「百聞は一見に如かず」となるだろう。本センターの日→英翻訳の授業で、現在「イメージ検索」を利用して説明している部分は、以前は言葉で説明するか、インターネット上から必要な画像を印刷して教壇から留学生に見せながら解説するしかなかった。そうして苦労して説明しても「隔靴掻痒」の感があったのは否定できない。しかしCALL教室導入後は、インターネットの使用、特にGoogleのイメージ検索の使用が自由に行えるようになり、状況が一変した。パソコンから留学生に自在に画像を見せられるようになり、今まで苦労したculture-specific wordsの説明、翻訳の妥当性の検討などが、スムーズにできるようになった。まさに「1枚の画像は、1000語の価値がある」という言葉そのままの変化が起きたのである。

3．Googleイメージ検索を活用した翻訳の授業

本章では、日→英翻訳の授業（正式な授業題目は「日→英翻訳者になるための実践コース」）でどのようにGoogleイメージ検索が役立ったか、また活用しているか、具体的な事例を紹介する。

3．1　イメージが湧きにくい単語・語句を説明する

Ear Flaps

（1）明かりをさげてゆっくり雪を踏んできた男は襟巻きで鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。（川端康成『雪国』）

The station master walked slowly over the snow, a lantern in his hand. His face was buried to the nose in a muffler, and the flaps of his cap were turned down over his ears.（translated by Edward Seidensticker）

これは『雪国』の冒頭部分である。教室でイメージ検索を利用できる以前は、the flaps of his capの説明が難しかった。実は英米人でも寒冷地に住んでいない限り、あまり見るものではないらしく、アメリカ南部出身の留学生など、この英語を聞いてもきょとんとした顔をしていた。flapとは、ODE（Oxford Dictionary of English）によれば、a thin, flat piece of cloth, paper, metal, etc, that is hinged or attached on one side only and covers an opening or hangs down from something（片側だけにちょうつがいのようにくっついて、あるいは結びついて、穴を覆っているか、何かから垂れ下がっている、薄くて平らな布、紙、金属など）とある。こんな説明を聞いてもますますわかりにくいかもしれない。しかしGoogleのイメージ検索で、flaps, capというkey wordsを入れればたちどころに図1、2のような画像が現れる。要するにキャップについている「防寒用の耳カバー」のことである。

図 1

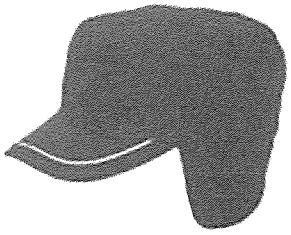


図 2

http://www.1st-harrison.com/shop2/index.php?act=viewProd&productId=18（図 1）

http://www.oregontrailoutfitter.com/advancedsearch_result.php?keywords=outfitters（図 2）

こうした画像を次々に見せるとクラスからは、「ああ」という感嘆の声が漏れる。なんとなく想像はできても、はっきりとはわからなかったものが、見える形で理解できるからだ。「かゆいところへ手が届く」とはこういうことをいうのだろう。

3．2　日本事象の説明

還暦

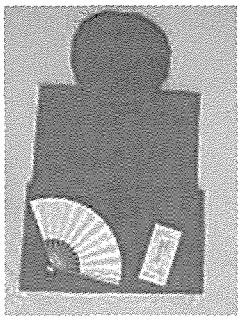
（2）60年で生まれた年の干支に再び戻り、また新しい暦が始まるので、赤いちゃんちゃんこを着て、60歳の誕生日を祝う。（『イラスト日本まるごと事典』）

At sixty years of age, the sexagenarian cycle is completed and we return to the zodiac sign of the birth years. People celebrate their sixtieth birthdays and wear a red vest on this day.[1)]

ちゃんちゃんこは、「袖なしの羽織、多くは綿入れ」（『明鏡国語辞典』）のことである。もちろん言葉で説明してもわからない。原文のイメージがわからなければ、red vestが適当な訳語かどうかもわからない。「赤いちゃんちゃんこ」で検索すれば、以下のような画像が数多くヒットする。色つきの画像で見られないのは残念であるが、鮮やかな赤を想像していただきたい。

図 3

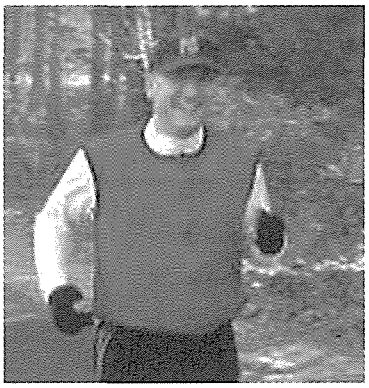
図 4



http://store.shopping.yahoo.co.jp/hinoyajp2000/20-1kannrekirinnzu.html（図 3）

http://www.rakuten.co.jp/wadouraku/760665/1850836/（図 4）

図5



http://www.southernct.edu/~sandifer/Ed/Roxbury/Roxbury2007/race0723.htm

さて、赤いちゃんちゃんこの訳語であるが、red vestで検索した図5などの画像を見ると、cultural equivalentとしては適当なようである（ベストの実際の色は真紅）。「綿入れ」にこだわれば、red padded vestと訳す手もあるが、イメージ検索で、実際に販売されている「赤いちゃんちゃんこ」の画像をいくつか見てみると、どうも綿が入っていないようだ（図4）。「還暦」のお祝いのための形式的なものだから、安上がりの「綿なし」を販売する場合が多いのだろう。とすれば、やはり訳例の通りred vestという英語で十分ということになる。

また、画像を見せることによって、還暦のときには、赤いちゃんちゃんこだけでなく、赤い帽子をかぶるのが通例ということもわかる。留学生は目の前の画像を見ることによって、より詳細に日本文化を知ることができるのである。

お辞儀

（3）座敷では、座布団からおり、手前に両手をついてお辞儀をする。
（『イラスト日本まるごと事典』）

In a *tatami* room, you move to the side of the cushion to show respect to the others present, and then bow with your hands placed in front of you.

『ジーニアス和英辞典』では、「座敷」はJapanese-style room（日本式の部屋）となっている。もちろんそれでもいいのだが、*tatami* roomという表現が最近はよく使われるようだ。この背景には、英語圏で日本文化の知名度が上がり、*tatami*だけでも通じるようになった事情がある。実際、普通の英英辞典にはtatamiが項目として載っている。

図6，7などの画像を見せると、Japanese-style roomよりも*tatami* roomとしたほうが、「座敷」の感じをよく伝えていることがわかる。外国人の目から見ると、まさしく「畳敷きの部屋」なのである。

図6

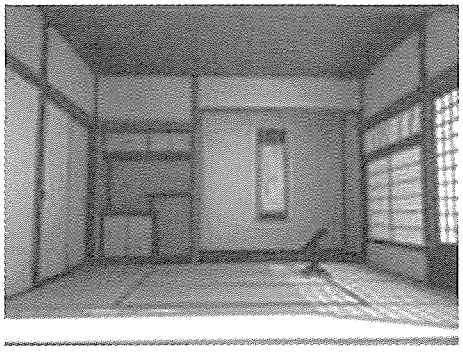


図7

http://ktg.sblo.jp/article/3269944.html（図6）

http://www.k5.dion.ne.jp/~h_fuji_p/omoya/kamizashiki/omoya-kamizashiki.html（図7）

お節料理

（4）漆塗りの重箱に盛りつけられたお正月用の保存料理。家族の健康や繁栄を願った名前の料理が多い。(『イラスト日本まるごと事典』)

Specially prepared New Year's food, beautifully arranged in lacquer boxes. Many of the delicacies inside are named in hopes for the family's health and prosperity.

翻訳させる前に留学生に何も注意を喚起しないと、ほぼ全員が「保存料理」をpreserved foodsと訳してしまう。preserved foodsとは瓶や缶に詰めた長期保存食品のことである。これは、イメージ検索で画像を見れば一目瞭然である。

図8

図9

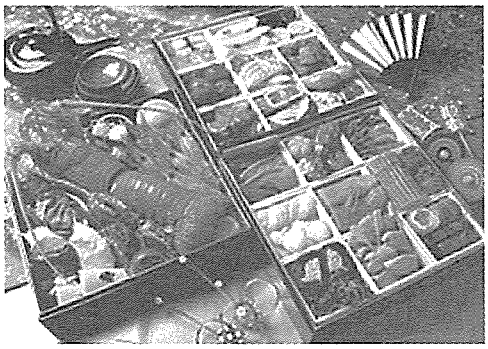
http://en.wikipedia.org/wiki/Food_preservation（図8）

http://www.naturemoms.com/canning-and-preserving.html（図9）

「お節料理」は、『新和英大辞典』（研究社）では次のように定義している。traditional Japanese food prepared in advance for consumption during the first three days of the New Year and containing various specified ingredients（伝統的な日本料理。新年の3日間に食べるために前もって準備され、さまざまなお決まりの食材を使う)。つまり、保存料理といっても、新年の3日間かけて食べても悪くならない程度の保存性ということなのである。英語圏では、このようなものを保存料理とはいわない。瓶詰め、缶詰などの長期保存食品のみをpreserved foodsという。こう説明しながら、留学生におせち料理の画像（図10、11）を見せる。

図10

図11



http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%A1%E7%AF%80%E6%96%99%E7%90%86（図10、11）

色鮮やかに並んだお節料理の画像を見れば、日本語では「保存料理」とあっても、preserved foodsでないことは明らかである。こうして英訳のようにspecially prepared New Year's food

（特別に準備された新年の料理）とするのが妥当であることが納得できるのである。

3．3　イメージを損なわずに翻訳する技術を説明する

別宮（1975：90）は、翻訳の際「原作者がその読者に与えた効果と同じ効果を、翻訳者はその読者に与えなければならない」という。そしてクインシー・モーガン（Quincy Morgan）のいう「同等効果の法則」（the law of comparative effect）こそ翻訳の要諦であると断言している。

翻訳にはさまざまなジャンルがあり、別宮の意見はすべてのジャンルの翻訳にあてはまるわけではない。しかし少なくとも一般読者を想定した商業翻訳の場合、別宮の言う「同等効果」を目指した翻訳が大半なのは事実である。筆者の日→英翻訳の授業でも、起点言語（source language）から目標言語（target language）へ転換する際、翻訳者はcomparative effect（or equivalent effect）を目指さなければならないことを学生に説明する。この前提を提示すると、なぜ翻訳者が原文に手を加えなければならなかったか、その理由がわかるからだ。

翻訳で「同等効果」を目指すといっても、二つの文化の間で、ある言葉が呼び起こすイメージが大きく異なる場合は厄介である。具体例を見てみよう。

（5）古池や　蛙飛び込む　水の音（芭蕉）

The old pond, aye! and the sound of a frog leaping into the water
（translated by Basil Hall Chamberlain）

チェンバレンは明治時代に帝国大学で教えたイギリス出身の日本学者である。この芭蕉の句の英訳は、俳句翻訳の最初期のものと考えられる。一見、何の問題もないように思えるこの英訳には実は問題が潜んでいる。チェンバレン自身その問題について次のように述べている（Chamberlain 1902：112）。

> From a European point of view, the mention of the frog spoils these lines completely ; for we tacitly include frogs in the same category as monkeys and donkeys—absurd creatures scarcely to be named without turning verse into caricature. The Japanese think differently : the frog, in their language, has even a poetical name—*kawazu*—besides its oridinal name, kairu, and his very croak appeals to them as a sort of song.
> （ヨーロッパ人からすると、frogという言葉を使っただけでこの詩は台無しになってしまう。というのも西洋人は、暗黙の了解としてfrogをサルやロバと同じ滑稽な動物に分類しているからだ。これらは、その名前をいえば詩が風刺に変わってしまうほど滑稽な動物なのである。しかし日本人の考え方は違う。frogは日本語では「かえる」という通常の名前以外に「かわず」という詩的な呼び名まである。そしてその鳴き声は、日本人には一種の歌として訴えかけるのである）

このイメージの違い—frogと聞いただけで口元がゆるんでしまうか、「かわず」と読んで詩的な表現になるか—が西洋と日本の文化の違いである。このイメージの違いを翻訳ではどのよう

に克服しているのだろうか。本節では、異文化間のイメージの違いのために、翻訳者が原文に手を加えた足跡を追う。そして授業で画像を使ってどのように説明したかを紹介したい。

裏通り

（6）四月のある晴れた朝、原宿の裏通りで僕は100パーセントの女の子とすれ違う。
（「四月のある晴れた朝」）

One beautiful morning, on a narrow side street in Tokyo's fashionable Harajuku neighborhood, I walk past the 100% perfect girl.
(translated by Jay Rubin)

これは、村上春樹の「四月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」（『象の消滅』所収、以下「四月のある晴れた朝」と表記する）の冒頭の部分である。わずか6ページ弱の短編であるが、留学生からは非常に人気がある小説である。30歳過ぎの日本人男性が、ある日東京の原宿で100パーセント自分にぴったりの女性とすれ違う。一体どうやって声をかけたらよかったのか、と主人公の男性があれこれ考える。そして一つのストーリーを思いつくというだけのお話である。このような男女の出会いの話は若い留学生の琴線に触れるものが少なからずあるのだろう。

さて「裏通り」を和英辞典で引くと、alleyとかbackstreetという英語が載っている。backstreetはOALD（Oxford Advanced Learner's Dictionary）では次のように定義されている。

a small quiet street, usually in a poor part of a town or city, away from main roads
（たいてい町や市の貧しい地域にある、大通りからは離れた静かな小さい通り）

alleyはa narrow passageway between or behind buildings（建物と建物の間、あるいは建物の背後にある狭い路地）とあって、やはり暗いイメージである。このことは、画像を見ると容易に理解できる（図12, 13）[2)]

図12 backstreet

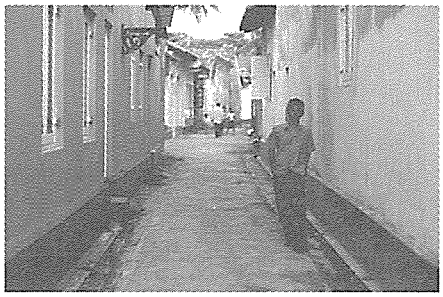
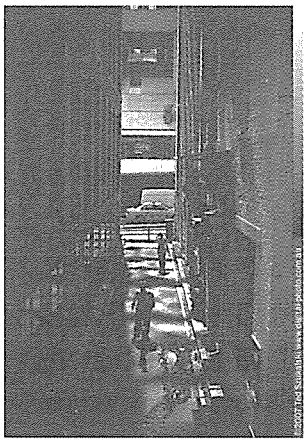


図13 alley

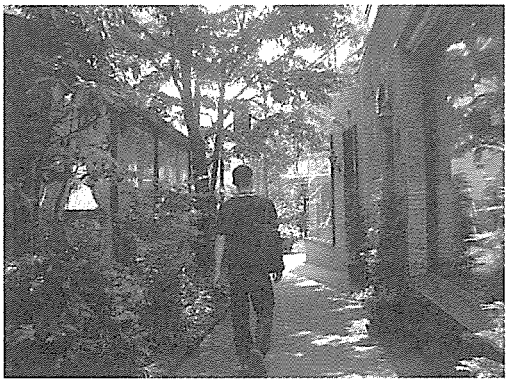


http://boxman.awazo.com/archives/2008/07/hes_not_young_to_play_in_the_b.html（図12）
http://www.digital-photo.com.au/2008/03/18（図13）

「四月のある晴れた朝」は若者の街、原宿を舞台にしたラブストーリーだから、「裏通り」にbackstreet、alleyといった訳語を当てると雰囲気が壊れてしまう。原宿の「裏通り」とは竹下通りを指している可能性が高いと思う（図14)。あるいは竹下通りではなく、竹下通りと平行に走っているブラームスの小径（図15）かもしれない。いずれにせよここでは、原宿にある「おしゃれな小道」というニュアンスである。

図14　竹下通り

図15　ブラームスの小径



http://www.j-area2.com/tokyo/wards23/shibuya/takeshitast.html（図14）
http://www.osanponavi.com/tokyo/index.php?e=43（図15）

本センターの留学生は普通、原宿も竹下通りも知っているが、村上春樹英語版の読者の大半は、原宿が「ファッションと若者の街」であることすら知らない。そうした一般読者のためにイメージを補って「原宿の裏通り」を訳す必要がある。その結果a narrow side street in Tokyo's fashionable Harajuku neighborhood（東京のファッショナブルな原宿地域にある、狭いわき道）という英訳が出来あがったのである。翻訳者がbackstreet, alleyという訳語を避けてside streetとしたのは、この語が比較的ニュートラルで、暗い、貧しいといったイメージが無いためである。

古い機械

（7）きっとそこには平和な時代の古い機械のような温かい秘密が充ちているに違いない。
（「四月のある晴れた朝」）
This was something sure to be crammed full of warm secrets, like an antique clock built when peace filled the world.
(translated by Jay Rubin)

「古い機械」をold machineと訳しては原文の雰囲気が台無しである。この語からは、ただ古びて使われなくなった機械しか想像できない（図16)。しかしantique clockと訳せば、原文のほのぼのとした温かいイメージが伝わってくる。(図17)

図16　old machine

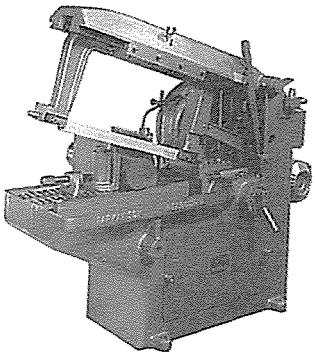
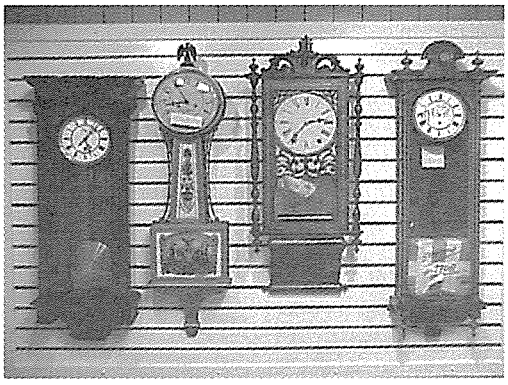


図17　antique clock



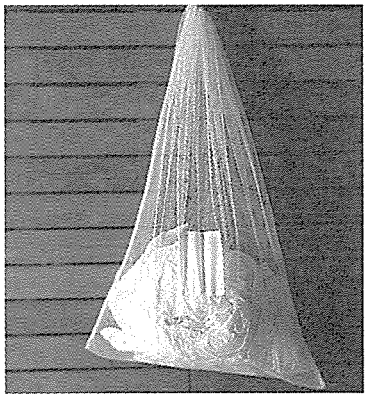
http://www.woodworkforums.ubeaut.com.au/showthread.php?t=73149&page=（図16）
http://www.rytstuf.com/oldclock.html（図17）

このように感じられるのは、時計に対する西洋人の愛着の大きさを示しているのだろう。彼らはantique clockという語から、日本人以上に人のぬくもりを感じるのである。

洗濯物袋

（8）これも同じくらい馬鹿げている。だいいち僕は洗濯物の袋さえ持ってはいないではないか。だれがそんな科白を信用するだろう？（「四月のある晴れた朝」）
No, this is just as ridiculous. I'm not carrying any laundry, for one thing. Who's going to buy a line like that?（translated by Jay Rubin）

図18



翻訳を知らない人は、「洗濯物の袋」とあるからlaundry bagと素直に訳せばいいと思うのではないだろうか。ところが訳者はbagを削除した。laundry bagと英語にしただけで、dirty laundryのすえた匂いが漂ってきて、美しいロマンスが台無しになってしまうからだ。（図18）この説明にクラスの学生はみな納得してくれる。クラスのカナダ人（男性）からは「laundry bagは普通は外で（ましてや原宿では）持ち歩かないから、変な感じがする。ここはやはりlaundryだけでよい」という意見もあった。

打ち水

（9）花屋の店先で、僕は彼女とすれ違う。温かい小さな空気の塊が僕の肌に触れる。アスファルトの舗道には水が撒かれていて、あたりにはバラの花の匂いがする。
（「四月のある晴れた朝」）
We pass in front of a flower shop. A small, warm air mass touches my skin. The asphalt is damp, and I catch this scent of roses.（translated by Jay Rubin）

他の大学で、日本人学生に「日本ではあまり報道されないが、中東紛争の背景には水利権をめぐる争いがあり、水問題は世界的な問題だ」と話したら、何を言っているのだろうとポカンとした顔をされたことが何度もある。世界の多くの国で水不足が問題となっている事実は、日本人にはなかなか実感できないようだ。中緯度で温暖な気候を享受している島国日本では、夏にどんなに水不足が叫ばれても、台風が一回通過するだけで問題は解消してしまうからだ。そうした日本に生まれ育った私たちは、植物に水をやる目的ではなく、通りに水を撒く「打ち水」の習慣が、世界の他の地域ではまず見られないことを忘れがちである。『ウィキペディア』では次のように説明されている。

打ち水（うちみず）とは、庭や道路など屋外に水を撒く、昔からの日本の風習である。また、その撒く水のことを指す。（中略）……打ち水には場を清める神道的な意味合いがあり、玄関先などへの打ち水は「来客への心遣い」のひとつであった。かつて、日本では風習として行われていたが、近年ではこういった心遣いの風習は廃れつつある。

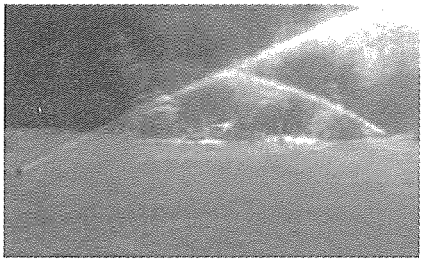
図19

http://blog.sizen-kankyo.net/blog/2008/06/000330.html（図19）

ウィキペディアの英語版を見ると、Uchimizuという見出しで同様の記載がある。「打ち水」は少なくとも英語圏には無い習慣である。またクラスの留学生への聴き取り調査でも、彼らの国ではこのような習慣はないという。「打ち水」は、神道的な伝統に根ざした日本独自の風習と見てもよいだろう。

原文で、「舗道には水が撒かれて」いるのは「打ち水」と考えてよい。打ち水のあとの湿った空気、爽やかな情感が、少女とのロマンチックな出会いの背景となっているのである。しかしもしも、これをwater has been sprinkled on the streetと直訳したらどうなるだろうか（実際は、そのように訳す学生がほとんどである）。クラスのカナダ人（男性）からは「そのまま訳すと、なぜ通りに水が撒かれているのかと読者が不思議に思い、立ち止まってしまう可能性がある」という指摘があった。また、それだけでなくsprinkleという語は、英語ではsprinklerを想像させる（図20）。

図20



http://www.billsdepot.com/services.shtml

つまり路上がsprinklerで水浸しになっているような感じを与えてしまうのだ。これではロマンスが台無しである。しかし、英訳のようにThe asphalt is damp.とすれば、まるでひとしきり小雨が降ったあと、アスファルトの地面が湿り気をもち、爽やかな涼風が吹いているような状況を読者に想起させる。訳者の巧みな工夫である。結局、翻訳者は原文と同じ効果（comparative effect）を与えることに成功しているのである。

3．4 cultural equivalentを用いた翻訳を説明する

一般読者向けの翻訳では、時にcultural equivalent（or cultural substitution）を使うことがある。文化的な相違が大きい言語間（ここでは日本語と英語）で翻訳を行う場合、直訳してもイメージが大きく変わってしまう場合がある（前出の「古池や」の俳句英訳参照）。その際に、2つの言語間でイメージ・機能がほぼ等しい単語が使われることがある。日本学者のドナルド・キーン（Donald Keene）が太宰治の『斜陽』の英訳 The Setting Sun（1958）の中で、「白足袋」をwhite glovesと訳したのはあまりにも有名である。

現在の商業翻訳でも、これほどあからさまでないにしても、やはりcultural equivalentが使われているのであるが、一般読者が読んでも気がつかない程度に留めている。これも、起点言語と目標言語間の「同等効果」（equivalent effect）を達成するための手段であると考えられる。本節では、気づきにくいcultural equivalent使用の実例と授業で行った解説を取り上げる。

オットセイかセイウチか

（10）僕はそんな具合に二十代の初めの歳月を、片足のおっとせいみたいにその微温的な手紙のハレムの中で過ごした。（村上春樹「窓」）

And so it happened that I spent a part of my early twenties like a crippled walrus in a warmish harem of letters.（translated by Jay Rubin）

本稿で取り上げた村上春樹の翻訳は、すべてJay Rubinによるものである。ハーバード大学の日本文学教授でもある彼の訳文を授業で検討していると「神業」と思われる箇所にしばしば出会う。語学的にはほぼ完璧である（Rubinの奥さんが日本人であり、彼が作者の村上春樹と友人ということも関係しているだろう。疑問点を妻や作者に聞けるメリットは大きい）。そして原文と英訳の「同等効果」の面では、華麗な技にうならされることが多い。

「窓」は『象の消滅』所収の短編である。男性の主人公が、多くの女性会員を相手に手紙の添削・講評のアルバイトをしていた大学生時代を回顧するという話である。バイトでやっていたとはいえ、女性に囲まれていたから「手紙のハレムの中で過ごした」のである。ところで、原文のオットセイが英訳ではwalrus（セイウチ）に換わっている。なぜだろうか？

『広辞苑』によれば、オットセイはアシカ科の海生哺乳類で、体長は、雄は約2.5メートル、雌は約1.3メートル。北太平洋に住む。一方セイウチは、セイウチ科の哺乳類で雄は体長約3.5メートル、雌は3メートル、体重1トンに達する。北極の周辺の海に生息する。

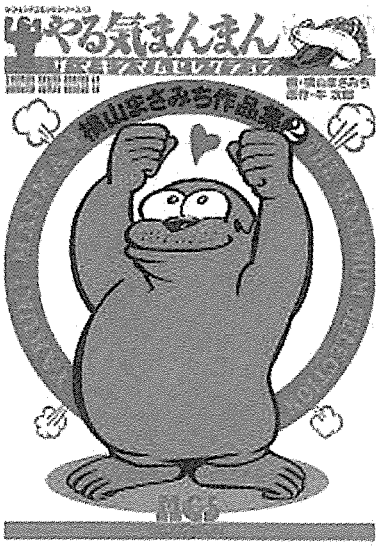
体長だけ比較しても、雄は1.4倍、ますは2倍以上セイウチの方が大きい。外見上の目立った違いは、セイウチは、雌雄共に上顎の犬歯（牙）が大きく発達していることである。オスは100cmにも達するという（『ウィキペディア』）。

しかしこれだけでは、なぜ訳者がオットセイからセイウチに言葉を換えたのか、説明がつかない。実は、日本語のオットセイと英語のwalrusとのもつイメージが、酷似しているのである。そのため、cultural equivalentとしてfur seal（オットセイ）の代わりにwalrus（セイウチ）を用いたと考えられるのである。もう少し詳しく説明しよう。

オットセイは「一雄多雌の繁殖群（ハレム）を作る」（『広辞苑』）ことはわが国では有名である。そのことと関係があるのか、そのペニスは「膃肭臍」（おっとせい）と呼ばれ精力剤とされ

てきた。また、日本ではオットセイのキャラクターを用いた成人漫画「やる気マンマン」が人気となり、ユーモラスなキャラクターとして愛されている（図21）。

図21

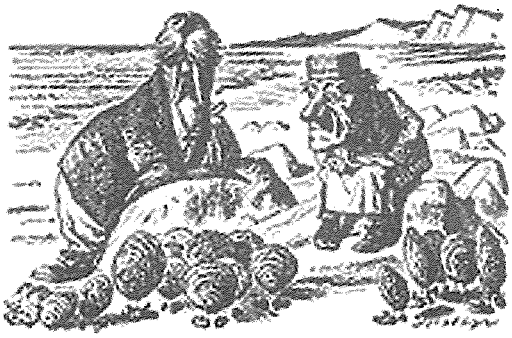


http://www.7andy.jp/books/detail/?accd=31821794

一方、英語ではオットセイは、fur seal（毛皮アザラシ）と呼ばれ、アザラシよりも質の良い毛皮が取れるため、この名前がついたといわれている（『ウィキペディア』）。つまり、日本語のオットセイは、ハレム、精力剤のイメージと結びついた滑稽なイメージがあるのにたいして、英語のfur sealは、その毛皮と結びついたイメージがもっぱらなのである。そうなると、もしも訳者が「忠実に」fur sealと訳したのならば、英訳では読者を思わず微笑ますようなユーモラスな効果は得られないことになる。

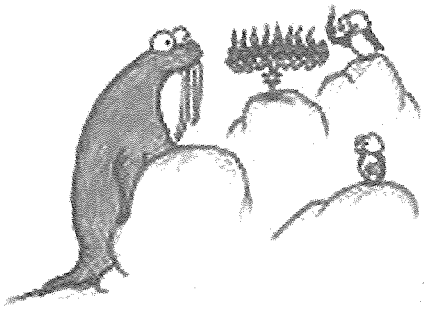
では、英語圏で、fur sealに似たユーモラスな動物とは何なのだろう。それがwalrus（セイウチ）なのである。イメージ検索をすると、『不思議の国のアリス』で有名なイギリスの作家ルイス・キャロル（Lewis Carroll）には、"The Walrus and the Carpenter"という詩があり、図22のようなwalrusを擬人化させたイラストが描かれたことがわかる。また、図23のようなユーモラスな画像が何件もヒットする。

図22



http://en.wikipedia.org/wiki/Walrus

図23



http://www.bluebison.net/content/?cat=66

“I am the Walrus” というビートルズの曲があるのをご存知の方もいると思うが、これらはすべて英語圏の文化の中でwalrusが親しみの対象となっていることを示しているといえよう。

さてクラスでの留学生の反応だが、crippled walrus（足が不自由なセイウチ）という訳語を見せると、英米の学生を中心にクスクス笑いが起きた。なぜ笑ったのかとアメリカ人（男性）に尋ねると、「うまく説明できないが、おかしくて思わず笑ってしまった」という。これも、見事に「同等効果」を達成した実例である。英訳でも、原文のもつおかしみ、滑稽さを出すことに成功しているからである。

キツネとタヌキ

(11) きつねもたぬきも　出ておいで　探検しよう　林の奥まで

（宮崎駿監督「となりのトトロ」）

The foxes and the badgers, too

All come out to play

They all want to explore

The deep and wonderful woods all day

（*My Neighbor Totoro*）

これは「トトロ」の英語吹き替えを授業で検討したときの例である。この英訳を授業で示したときに、アメリカ人（男性）が「え～、タヌキはraccoonじゃないの？」と大きな声で叫んだ。タヌキは、英語ではraccoon（アライグマ）ではなくraccoon dogというのが正しい。しかしここではbadger（アナグマ）が使われている。いったいなぜなのだろうか。紛らわしいが順を追って考えてみよう。

まずraccoon dog（タヌキ）は、ODEでは次のように定義されている。a small wild dog of raccoon-like appearance, with a black facial mask and long brindled fur, native to the forests of south and east Asia（イヌ科の小型野生動物。アライグマに外見が似ている。顔の一部が黒く、長いまだらの毛が生えている。南アジア、東アジアの森に生息している。）

図24　タヌキ

図25　アライグマ

raccoon dog（タヌキ）は、アジア（実際にはシベリアにも）に分布するイヌ科の動物で、アメリカ、ブリテン島など英語圏の国では通常見られない。一方raccoon（アライグマ、図25）はタヌキには似ているがアライグマ科の哺乳類で、カナダ南部～中央アメリカに分布する。北アメリカの人々にはなじみの動物だ。だから、馴染み深いアライグマの連想から、イヌの仲間であるタヌキを彼らはraccoon dog（アライグマに似た犬）と呼ぶのだろう。そして前出のアメリカ人学生も、raccoon dogとraccoonを混同したのだろう。

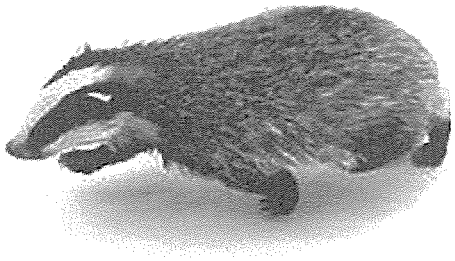
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BF%E3%83%8C%E3%82%AD（図24）

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%A9%E3%82%A4%E3%82%B0%E3%83%9E（図25）

では、英訳では、なぜタヌキの訳語としてraccoon dogによく似たraccoon（アライグマ）を使わなかったのだろうか。なぜbadger（アナグマ）を使ったのだろうか？

アナグマ（学名 Meles meles）はイタチ科に属し、ヨーロッパ・アジアに分布する動物である（『ブリタニカ国際大百科事典』）。[3] イギリスでは、伝統的に犬をけしかけ巣穴からアナグマを引きずり出して殺させるbadger baitingというスポーツが行われていた。この残酷なスポーツは、イギリスでは1830年に法律で禁止された。またfox hunting（キツネ狩り）は16世紀にイギリスで始まったスポーツであるが、現在はやはり残酷性が議論を呼んでいる。このように、キツネとアナグマはイギリスでは昔からスポーツの対象とされてきたという事情がある。いささか血なまぐさい話ではあるがこれは、キツネとアナグマがイギリス文化にとってなくてはならないものであった証拠でもある。

図26　アナグマ



http://en.wikipedia.org/wiki/European_Badger（図26）

またそうしたスポーツができるような動物とは、イギリスの日常風景のありふれた動物であった（ある）はずである。そのため英語圏国民には、今もなおfoxとbadgerがペアで連想されるのであろう。実際、Googleのウェブ検索（画像検索ではない）で“foxes and badgers”といれて調べると、10,000件以上もヒットする。

もう一つ実例を出そう。

（12）するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸（こり）が棲（す）む。盗人（ぬすびと）が棲む。
（芥川竜之介「羅生門」）
Foxes and badgers came to live in the dilapidated structure, and they were soon joined by thieves.
（translated by Jay Rubin）

この芥川の小説の英訳でも、キツネとタヌキをfoxes and badgersと訳している。「ととろ」にせよ「羅生門」にせよ、厳密な意味では「誤訳」しているのは興味深い[4]。実は、これらの例に限らず、キツネとタヌキを英語に訳す場合、科学資料として厳密さを要する場合を除けば、foxes and badgers（キツネとアナグマ）とするのが普通なのである。

キツネとタヌキは、日本では、昔から人間をだます動物として知られている。このペアは、現在でも、大衆食であるそばやうどんのメニューに使われ毎日のようにその名前を聞く。これほど日本文化に根付いた動物は他に想像できないだろう。この日本の最強ペアほどではないが、英語文化圏ではfoxes and badgers（キツネとアナグマ）がペアとして連想される動物となっており、一般向けの翻訳では、「キツネとタヌキ」の訳語として使われているのである。これもcultural equivalentを用いた翻訳の一例である。

4．おわりに

今まで見てきたようにイメージ検索機能を使うと、留学生に即座に難解語や日本事象を理解させることができる。また、かゆいところに手が届く翻訳の解説が可能になる。本稿では代表的な画像しか掲載できなかったが、実際の授業では、教師が検索しながら数枚の画像を次々に見せていく（といっても何を見せるか事前準備は必要である）。以前は教師が印刷した写真等を見せていたが、これは時間やお金がかかるだけでなく、学生の印象にも残りにくい。教室のインターネットでたくさんの画像を見せれば、学生が事象の全体像をつかみやすくなり、教師の側の時間も経費も節約できる。そして何よりも教師が検索しているところを学生がパソコン上で見ることができるので、彼らが効果的な検索の仕方を学ぶことができるのである。つまりこの授業を受けたあと、彼らが自主的にGoogleを使って日本事象を調べ、日本文化に対する理解を深め、自らの翻訳にも役立てることができるのである。きっと彼らが母国に帰ってからも、この学習方法を役立ててくれるであろう。これはインターネットによる授業の副次的効果ではあるが、最終的に、留学生が自立的な学習を身につけられることこそが、CALL教室でGoogleを用いた授業を行う最大の利点であるかもしれない。

注

1）訳文にはsexagenarianとあるが、これはa person between 60 and 69 years oldという意味の単語だから誤り。正しくはsexagenaryか、簡単にsixty-yearとすべきである

2）普通にbackstreetといれて検索すると、Backstreet Boys（バックストリート・ボーイズ）という有名なポップ・グループばかりが上位にヒットしてしまう。これを防ぐためには、backstreet-boysと入れて検索し、boys入りの画像が出ないようにする工夫が必要である。

3）北アメリカにもアナグマは生息するが、アメリカアナグマ（American badger、学名Taxidea taxus）と呼ばれ別種のものである。

4）「厳密な意味では誤訳」と書いたが、タヌキとアナグマは、どちらも夜行性の動物で外見も似ていることから、日本ではしばしば混同されてきたようだ。狢（むじな）という言葉は、辞書・辞典では次のように記述されている。

むじな
1．アナグマの別名
2．（毛色がアナグマに似ていることから混同して）タヌキのこと。（『大辞泉』）

ムジナ
タヌキの方言だが、一部の地方ではアナグマをも混同して呼ぶ。（『百科事典マイペディア』）

おそらく西洋の厳密な「分類学」が導入される以前の日本では、アナグマとタヌキをはっきり区別しなかったのだろう。現代の「分類学」から見れば、「混同」ということになるのだが、当時の特に一般民衆は、夜行性のこの2種類の動物を厳密に区別する必要もなかっただろう。現在では別の科（それぞれ食肉目イタチ科、食肉目イヌ科）に分類されるアナグマとタヌキであるが、近代以前の日本ではどちらも「狢」（むじな）と呼ぶことがあったようである。そしてその名残りが現在の辞書・辞典の定義にも見られるのでは

ないか、と筆者は考えている。

例文の出典

芥川竜之介（1960）『羅生門・鼻・芋粥・偸盗』岩波書店

インターナショナル・インターンシップ・プログラムス（2001）『イラスト日本まるごと事典』改訂第2版，講談社インターナショナル

川端康成（1947）『雪国』新潮社

宮崎駿監督・スタジオジブリ制作（1988）「となりのトトロ」徳間書店

村上春樹（2005）『象の消滅』新潮社

Rubin, Jay (trans.) (1993). Haruki Murakami, *The Elephant Vanishes*, New York : Vintage

Rubin, Jay (trans.) (2006). Ryūnosuke Akutagawa, *Rashomon and Seventeen Other Stories*, London and New York: Penguin

Seidensticker, Edward G (trans.) (1956). Yasunari Kawabata, *Snow Country*, New York : Alfred A. Knopf

参考文献

別宮貞徳（1975）『翻訳を学ぶ』八潮出版社

Chamberlain, B.H. (1902). Basho and the Japanese Poetical Epigram, *the Asiatic Society of Japan*, vol. 2, no. 30, 91-129.

Higashino, Yumi. (2001). Cultural equivalence: its effectiveness and complications—Has "white gloves" achieved the equivalent effect of "shiro tabi"?, *Interpretation Studies*, vol.1, 53-63.

金田一春彦（1988）『日本語 新版（下）』岩波書店

金田一春彦（1991）『日本語の特質』日本放送出版協会

Nida, E. A., C. Taber and N. Brannen著／沢登春仁・升川潔訳（1973）『翻訳—理論と実際』研究社

鳥飼玖美子（1998）『ことばが招く国際摩擦』ジャパンタイムズ

（おぐら　よしろう　大阪府立大学准教授、本センター非常勤講師）